慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エドウキン・R・A・セリグマン教授逝く
Sub Title	
Author	三邊, 清一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.12 (1939. 12) ,p.1613(97)- 1632(116)
JaLC DOI	10.14991/001.19391201-0097
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19391201-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エドウィン・R・A・セリグマン教授逝く

三邊清一郎

一

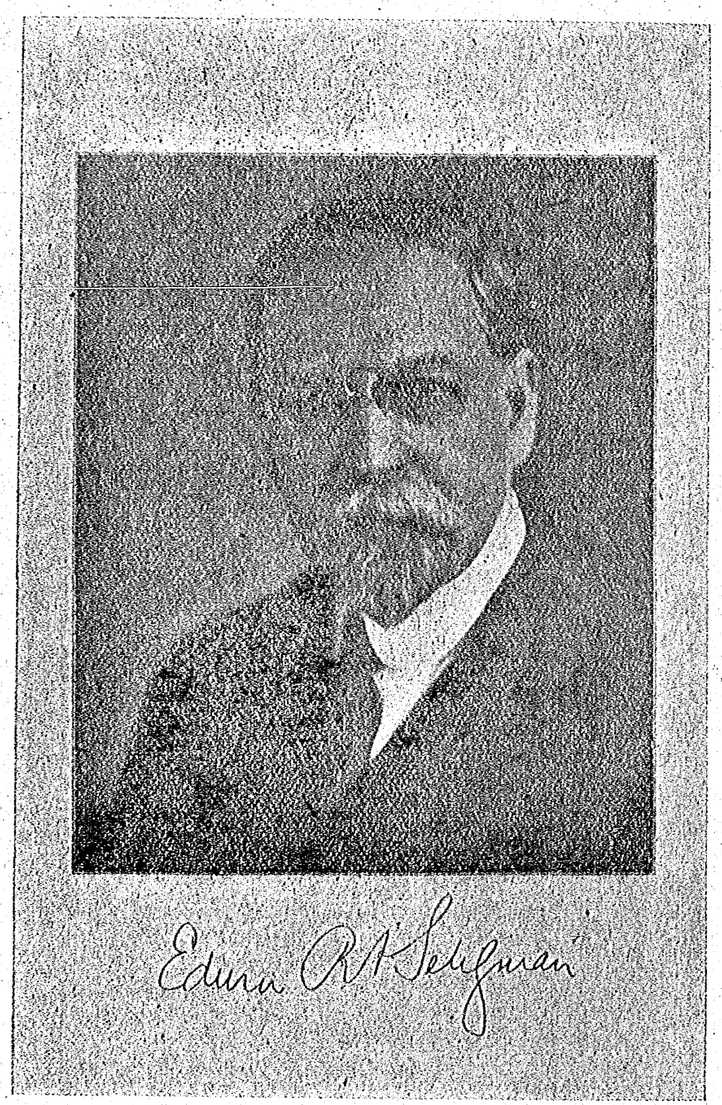
今夏七月十八日ニュウヨオク州アデイロンダック、プラシット湖畔の山莊に於いて、コロンビア大學の經濟學、財政學、マックヴィカア名譽教授エドウィン・ロバアト・アンダアソン・セリグマン(Edwin Robert Anderson Seligman)氏が、七十八歳(日本流には七十九歳)の長壽を保つて逝いた。氏は河上肇譯「歴史之經濟的說明、新史觀」(明治三十八年)、關口健一郎譯「租稅轉嫁論」(明治四十一年)、石川義昌譯「セリグマン氏經濟原論」(明治四十五年)等によつて夙くからわが國に紹介せられ、殊にその經濟原論 Principles of Economics 1905 は長く大學、專門學校の教科書として採用せられたから、彼によつて經濟學への道を開かれた人も多からうと思ふ(中央公論昭和十四年四月號所載、小泉信三博士「我が大學生活」參照)。彼のその本國に於ける輝かしき名聲は、ニュヨオク、タイムスの追想文標題に於ける「學界の耆宿、コロンビア大學名譽教授、一八八五年以來教育に携る。政府顧問。キューバ租稅計畫の立案者であつて、また多數聯邦及び地方團體に貢獻」といふ言葉に要約されて居る(The New York times, July, 19., 1939. E.)。彼は一九一〇年その國の有識者達から「學者、教師、及び市民として公の福祉に捧げた、二十五年の顯著な貢獻」を祝福されたが

エドウキン・R・A・セリグマン教授逝く

(The Times, July 20., 1939. Obituary. Dr. E. R. A. Seligman. P. 9.; Economic journal. Sept. 1939. Obituary. Edwin Robert Anderson Seligman (1861-1939), by G. Findlay Shirras. P. 578.)、その後も研究の筆を絶たず、新著に、論文にその勞作を發表して、經濟學及び財政學の權威として殊に學界に指導的地位を獲得したのであつた。彼は極めて纖細な蒲柳の質であつたと稱せられるけれども、六十年に亙る學究生活とその業績とは、眞に驚くべきものがある。ポリテイカル・サイエンス・クオタリーの追憶記は、「彼は眞に長壽と光榮に滿ちて世を終つた」と結んで居る(Political Science Quarterly. Sept. 1939. "In Memoriam." P. 83.)。

セリグマンは南北戰爭勃發の一八六一年四月二十五日ニユウヨオク市に生れた。セリグマン・ジ・シフ、バベット Joseph and Babette 夫妻の子である。彼が教養ある榮えた家庭に生れたことは幸福であつた。彼はウオール街に有名なセリグマン・ファミリイの一員であつて、同市の資本家アイザアク・セリグマン Isaac Newton Seligman(1855-1917)はその兄である。彼は十一歳まで家庭で教育を受けた。その時の教師が、童話作家として有名なホラシ・アルガア Horatio Alger (1834-99)である。彼は後者からよき文學に對する感覺と古典語學の基礎を授けられた。一八七五年コロンビア大學に入り、文學、法律、哲學を修め、卒業(一八七九年)後歐羅巴に遊んで、ベルリン、ハイデルベルク、巴里の諸大學に學んだ。

ベルリンで主として研究したのは歴史學及び法學であつて、ドロイセン及びグナイストの研究室に入り、またトライチュケの講義を聽いた。こゝで彼は法律と經濟との關係に就いて認識を深めた。また特に經濟學に就いて言へば、ベルリン大學でワグナア及びシュモラアの講義を聞き、ハイデルベルクではクニースの研究室に入つた。彼はこの頃から經濟學に特に興味をもつたと言つて居る(Die Volkswirtschaftslehre der Gegenwart in Selbstdarstellungen, hrg. von Felix Meiner. Bd. II. 1929. S. 117-18.)。け



エドウキン・R・A・セリグマン教授逝く

れどもこの學問が主として彼の關心を把えるに至つたのは、巴里に移つてからである。しかし巴里に於ける經濟學研究は彼に深い影響を與へたとは思はれない。そこでは寧ろ社會學者、哲學者の研究が彼の心を動かしたらしい（a. a. O.）。（S. 142.）彼はソルボンヌでルロア・ボリュウの講義を聽いたが、佛蘭西經濟學は當時「なほ全く舊古典學派に屬し、その後間もなくジイドが提げて立つたかの新傾向はまだ現はれて居なかつた、」と評して居る（a. a. O.）（S. 119-20.）。

この歐羅巴に於ける遊學が彼の學問上その他生涯の活動に著しい影響を與へて居ることは言ふまでもない。第一に考へられるのはワグナーの影響である。G・F・シラス等もそれを言つて居る（Economic journal. Sept. 1939.）。（p. 573; The times. Obituary.）。けれども彼自身は、これに關しては、彼が生涯の研究として財政學を取上げるに至つたのは、偶然の機會に因るものであつて、その研究に獨逸文獻に俟つことは甚だ尠なかつたことを再三の機會に述べて居る（Volkswirtschaftslehre in Selbstdarstellungen. Bd. II, S. 123, 147.）。（後段參照）またこの若き青年學徒が方法論に就いてマルクスに學ぶところあつたことも亦事實であつた。彼は無論社會主義者たるに最も適はしくない人であるが、一九〇二年の「歴史の經濟的說明」The economic interpretation of history はこの影響の下に書かれたのである（a. a. O.）（S. 143.）。

當時獨逸の學界は、恰も歴史學派全盛の頃であつた。だから彼がそこでこれから尠からぬ影響を受けたことは、言ふまでもない。そしてこれは彼自ら認めて居るところである（a. a. O.）（S. 141.）。けれどもこの學派の極端な歴史的、比較的方法と古典學派の輕視とは、その鄕國に於いて正統派經濟學によつて養はれて來た彼には、容れ難いものであつた。のみならずこの學派の理論的推究の貧困は、彼の眼を免れる筈はなく、また當時恰もシュモラア、メンガアの間に鬪はれた方法論々爭は、尠くも彼をして批評的立場に還らせたのであつた（a. a. O. S. 141. E. A. Seligman, Essays in economics, 1925. p. 149.）。殊にその場合クニースが彼に與へた特殊の影響は看過することが出來ない。彼は「この人は歴史學派の建設者として表されて居るけれども、教室でもゼミナアルでも古典學派の跡を追ひ、私がリカアド及び貨幣、信用理論の基礎知識を獲たのは彼に由るものである、」と後者を回顧して居る（a. a. O.）（S. 118.）。

而してこれ等の影響は、後のクラアクのそれと共に、その理論經濟學の主著「經濟原論」に明かに認め得られるところである。「一九〇五年に公にせられた經濟學原理に關するこの著書に於いて、私は獨逸で學んだ歴史的及び比較的方法と英吉利古典學派の精粹との結合に努め、また特に問題の社會的關係に重要を置いた。財の分配の分野では同僚ジョン・ベエツ・クラアクの限界效用理論から影響を享けるところが多かつた。」（a. a. O.）（S. 130.）寔に「理論經濟學の學者は總べて一部歴史家でなければならないし、また經濟組織發展の研究者も一部理論家でなければならない」とせられた彼の時代、殊にアメリカに於ける彼は典型的學者であつたのである（Economic journal. Sept.）（1939. pp. 578-79.）。（註）

（註）「だから私は常に、言はゞ新舊兩者の仲介者たるやう努めた。舊來演繹方法の實生活適用上の不成功はこれを認めた。しかしこの方法が有ゆる社會科學に於いて缺くべからざる用具であることは、初めから明かであつた。私が利用し、私の學生に敎へ込まうと思つたのは、歴史的、比較的方法と演繹法との結合であつた。」――Volkswirtschaftslehre in Selstdarstellungen. Bd. II. S. 141.

二

一八八二年の秋、彼は歸國して再びコロンビア大學に研究を續け、八四年にM・A及びL・L・Bを、八五年にはPh・Dを獲得し、間もなくそこの教授團から政治學部講師として迎へられた（Political Science Quarterly, Sept., 1939. "In Memoriam." p. 481. Die Volkswirtschaftslehre in Selbstdarstellungen. Bd. II. S. 122. Butler, Nicholas Murray, Across the bussy years, 1939. p. 163.）。その頃の學界に、彼の活動に注意すべきものに「米國經濟學會」American Economic Association の設立がある。本會は、獨逸歴史學派の影響の下に、「經濟學は科學として猶

は發展の初期階段にあることを信じ、……その發展の滿足なる完成のために、思索よりも經濟生活の現實の狀態の歷史的、統計的研究に訴くることを綱領の一として、（註）R・T・イリーが唱導し、彼がこれを助けて、一八八五年サラトガに發會を見たものである（Publications of the American Economic Association. vol. 1. 1887. Platform, p. 7.; Volkswirtschaftslehre in Selbstdarstellungen. Bd. II., S. 121.）。一八八八年には助教授となり、またカロリン・ベーア夫人 Calorine Beer を迎へた。夫人との間には一男二女を擧げたが、うち二令孃に先立たれた。彼の生涯の對象となつた財政學の研究が始められたのはこの頃（一八九〇年）である。その頃この學部に政治學全體を包括する叢書刊行の計畫があり、財政學の題目が彼に同僚から「何等かの特別の理由によるよりも寧ろ偶然に」割當てられた。彼はそれに就いて、國の財政に就いては殆んど知るところがないからと斷つたが、容れられなかつたのだと後に言つて居る（a. a. O. S. 123.）。

（註）この綱領は間もなく放棄せられた。——E. A. Seligman; Essays in economics. 1925. p. 140

一八九一年には經濟學及び財政學教授に進み、一九〇一年メイヨー・スミスの後を襲つて經濟學部長に就任した（a. a. O. S. 139）。そして一九〇四年には同大學のマックヴィカア McVickar 紀念講座（經濟學）の初代教授に任ぜられて長くこの職に留まり（Political Science Quarterly. Sept. 1939. "In Memoriam." p. 481.）。（註）一九三一年隱退して名譽教授 Professor Emeritus in residence となつた。然るに恰もこの頃社會科學統合の時代到來したものとして、アメリカの學界に「科會科學辭典」Encyclopaedia of the Social Sciences 編纂の企があり、彼はその編輯主任に推薦せられて、一九三五年その十五卷を大成した（Vol. I. Preface. a. a. O. S. 136）。これが彼の最後の學問上の大事業である。

（註）マックヴィッカァ John McVickar は、一八一八年より五九年までコロンビア大學で、道德哲學及び經濟學を教へた。彼は米國で經濟學の講義を行つた最初の人だとせられて居る。——G. F. Shirras, E. R. A. Seligman. In "Economic Journal," Sept. 1939. p. 579. note.; A history of Columbia University 1754-1904. 1904. p 205.; A guide to Columbia University, ed. by J. W. Robson. 1937. p. 9.; Parlgrave's Dictionary of Political Economy. vol. I. 1925. p. 581.

彼は學者であつたばかりでなく、事務的才幹にも富み、幾多の公職に就いた。すなはち次の通りである。——

President Roosevelt's Commission on Statistical Reorganisation 委員(1908.)

Trustees of the Bureau of Municipal Research 議長(1905-6)

Mayor's Tax Committee 議長(1914-16)

Joint Legislative Tax Committee 專門顧問(1919-22.)

President's Unemployment Conference 議員(1921.)

League of Nations Comittee on Economics and Finance 專門委員(1922-23.)

Special State Tax Commission of New York 委員(1930-32.)

Financial Adviser to Cuba, (1931.)

New York Budget Commission 副議長(1933-)

また外國の團體では

British Economic Association. Institut de France. Accademia dei Lincei（ローマ） RussianAcademy of Science.（レニングラード） Société d'Économie Politique.（巴里） Accademia delle Scienze Morali e Politche.（ナポリ） Masaryk Institute of Sociology.（チェコスロヴァキア） Academy of Science（ヘルシンキー） Cuban Academy of Political and Social. Science.

等の學會から會員に推薦された。ポリティカル・サイエンス・クオタリー Political Science Quarterly「コロンビア歴史、經濟學及び法律學叢書」Columbia Series in History, Economics and Public Law の編輯者にもなつた。一九二六年白義耳學會 der belgischen Akademie der Wissenschaften からラヴレイヱ賞 Laveleye Preis を贈られたことも逸してはなるまい(Economic Journal. Sept. 1939. p. 579-80.; Volkswirtschaftslehr in Selbstdarst. Bd. II. S. 138.)。

また種々の機會に、租稅問題に關し意見を徵せられることも多かつた。例へば一九二一年國際聯盟が國際重複課稅の問題を取上げるや、彼はその專門顧問に任命せられ、J・スタム卿その他と共にそれに關する報告 Report on double taxation, submitted to the Financial Committee by Professors Bruins, Einaudi, Seligman and Sir Josiah Stamp. 1923. を書いた(a. a. O. S. 135-36. 成瀨奈雄「國際重複課稅の防止」三田學會雜誌、第二三卷第五號、八頁以下參照)。また一八九四年の所得稅法が憲法上の問題となり、租稅の公正に關し大審院判事の意見が兩分した時、彼はデヴィッド・A・ウェルズに反對して、その適正を證明する資料を提供した。この難問は憲法の改正によつて回避されたのだが、彼の論述には今日猶傾聽べきものがある(Seligman, E. R. A., The incom tax, 1914., 2. ed. 1921. pp. 493-; Ref. Tunell, George, The legislative history of the second incom-tax law. In "Journal of Political Economy." vol. III. 1895. pp. 311-; Economic Journal. Sept. 1939. p. 580.)。

しかし意見を求められたのは、公共團體から丈けでなかつた。一九二六年彼はゼネラル・モオタアス會社から自動車及び月賦販賣制度に關して調査を依頼された。その結果公にされたのが、この消費者信用に關する名著「月賦販賣の經濟學」The economics of instalment selling, 1928. である。そして本書の成功は、更に他の幾多實業家から實際問題に就き所見を求められ(a. a. O. S. 137.)、その研究を經營學的方面に向ける機緣ともなつた。

III

彼の學問上の業績はその長い著作文獻の表がこれを示す(參後照段)。疲れを知らぬ六十年の彼の學究的生涯は普通人のそれに倍する。いまその著作の主なるものを大別すれば、次の數期に區分し得ると思ふ。

先づ

Two chapters on mediaeval guilds of England, (1887).

Finance statistics of American Commonwealths, (1889).

及び

The shifting and incidence of taxation (1892).

Essays in taxation (1895).

の初期の著作がある。次の時期には

The economic interpretation of history (1902).

The principles of economics (1905).

の二の理論的主著が公にされ、エコノミック・ジアナルに "On some neglected British economists" が寄せられた(Economic Journal vol. 13, 1903 pp. 335-63, 511-35.)。後者は後に比較生產費法則の發見を繞つてホランダアとの間に學史的論爭を導いたものである(Ibid. p. 341-; Palgrave's Dictionary of Political Economy, vol. III. 1926, p. 789; Hollander, J. H., David Ricardo, 1910, p. 92-; Economic Journal, vol 21, 1911, "Ricards and Torrens," p. 448-; Ibid. Sept, 1939. p. 582.)。

第三期のものとしては、一九一一年の The income tax より一九二五年の Studies in public finance に至る主として財政學的な一聯の勞作が擧げられるだらう。この時期は歐洲大戰のそれを含み、これを對象としたものに、

An economic interpretation of the War (1915).

Economic influence of the War on the United States (1916. Economic Journal).

The economic prospects of the United States after the War (1917, Scientia, Milan).

Loan versus tax (1918, Annals of the American Academy of Political and Social Science).

A constructive criticism of the U. S. A. war tax bill (1917- Publications of the National Bank of Commerce).

How to finance the War (1917. Columbia war papers.).

がある。彼がこれ等の論著、論文に於いて執つた立場は、他の場合に於けると同様に、公債、租税両主義の間をゆく折衷的なものである（Volkswirtschaftslehre in Selbstdarst. Bd. II. S. 132.）。彼はまたこの頃、その思想史的論文その他を Essays in economics (1925) に纒めた。

第四期すなはち晩年には彼の注意は商業學的方面に向けられた。

The economics of instalment selling (1928).

The economics of farm relief (1929).

Price cutting and price maintainance (1932).

がその主なものである。彼はまたその主宰する Encyclopaedia of the social science に、Introduction, What are the social science? 以下二十篇の財政學的、思想史的諸項を書いた。

四

上に見るやうに理論經濟學は、彼の研究に於いて重要なる地位を占める。けれどもそこに於ける彼の態度は、折衷的立場を多く出づるものでない。彼はそれを次のやうに概括して居る。

「價値論では當然墺太利學派の影響を受けた。ビョーム・バウァークが、ハイデルベルクでクニースに學んだ折の同窓であつたからである。けれども墺太利學派にもまして私に重要なのは、永年の同僚ジョン・ベエツ・クラアクであつた。その結果、私は『經濟原論』で限界效用説に加はることになつたのである。しかし丁度方法論で歴史學派の極端な態度に反對したやうに、價値論でも、古典學派に正しいと認めるものを放棄することは、同意できなかつた。その結果私はこゝでも、他の多くの分野でと同じく仲介者として働き、利用價値及び費用の相互作用に注意を促すに努めた。

「そのうちにある點に於いて私は從來の理論に、價値論中の社會的要素とでも稱し得べきものゝ缺けて居ることに氣がついた。この考察に想到させたのは、パンタレオニである。私はそれに就いて二三論文を書いた後『原論』で、社會に於ける社會的若くは經濟的價値の眞の基礎と思はれるものを作り上げやうと試みた。この理論から私は、國際貿易から學ばれた古典學派の比較生産費説は、有ゆる經濟現象に齊しく適用できるといふ認識に達したのである。……

「いま一つの思索の成果は、クラアクよりもフェタア及びフィッシアに負ふところが多い。それは資本化された所得としての資本の理解である。私はこれを、價値問題全體を明かならしめるものだと信じて居る。」（Die Volkswirtschaftslehre in Selbstdarstellungen. Bd. II. S. 144-46.）

彼の經濟學に對する最大の貢献は、言ふまでもなく、財政學殊に租税論の部面にある。彼の該博な文献の知識を以つて書かれたこの方面の研究は、これを概觀するさへ容易でない。彼は「三卷より成る財政學原理に關する一書」を

計畫したが(a. a. O., S. 140.)、遂に實現の機會をもたなかつた。すなはち彼は「一般的諸原理を包括する書物は、學者の生涯の始めよりも寧ろ末期に於いて著はさるべきものであり、また幾分豫備的研究も必要であるといふ事實を顧慮して、廣い範圍に亙つて樣々な關係事項の研究を初めた」が(Studies in public finance, 1925. Preface p. V.)、彼の撓ゆまぬ研究の努力と學的水準の向上とは、絶えずその所説の修正を必要ならしめ、遂に完成の期を失せしめたのである。例へば吾々はThe social theory of fiscal science (Political science quarterly. vol. 41, 1936. pp. 193-218, 354-83.) に於いて、舊著に於ける多數財政學上の基礎概念、定義が根本的に修正され居るを見るのである(Political science quarterly, Sept. 1939. p. 482.)。だから私は彼のこの方面の貢献に就いても、亦彼自身の言葉に聽いた方がいゝと思ふ。すなはち彼はそれを、一、財政制度の分類、二、利益説及び納税力説の適用範圍と限界、三、累進税理論、四、租税轉嫁論、五、戰時公債論のそれの五に要約し、次のやうに言つて居るのである。

「こゝ〔租税轉嫁論〕では、私は獨逸の學問から、殆んど助力を享けなかつた。そこに於ける著述は、廣汎な疑はしい少數の概論に止まつたからである。私はこゝで再び考察の出發點を、パンタレオニ――恐らく彼は前世代に於ける有能俊敏な歐羅巴經濟學者の第一人者であらう――に見出した。勿論私はこの問題を詳細に研究し、それまで看過されて居た有ゆる實際的效果を盡した。そして更に考究を重ねた後、この問題は、今日でさへ多數論者によつて附隨的にしか取扱はれて居ないが、眞に財政學全體の核心を成すものだ、との結論に到達したのである。」(a. O. S. 146,147.)。

彼の教授としての生活が長かつた丈けに、その門下に出る逸足の數も多かつた。このことも彼の學界に對する貢献として擧げなければなるまい。證券取引所論に於けるH. C. Emery、保險理論に於けるA. H. Willet 鐵道のW. Z. Ripley、産業統制に於けるFrancis Walker, W. S. Stevens、貨幣、信用理論に於けるB. M. Anderson jr. 及びH. A. E. Chandler はその一部である(a. a. O. S. 147-148.)。

五

彼の生涯を顧みるに當り、その經濟文庫の蒐集を逸しては、その記述は完全なるを得ない。その蒐集は、ケエンズがゴールドスミス文庫、フォックスウエル（第二次）文庫と共に世界の三大經濟文庫と稱して居るものであつて(J. M. Keynes; Herbert Somerton Foxwell. In "Economic Journal." Dec., 1936. p. 607.)、第一次フォックスウエル文庫がゴールドスミス會社の手に買收、倫敦大學に寄附せられて以來、私人の有にかゝる最も勝れたものと言はれる(The times, July. 20. 1939. Obituary. p. 9.)。（註）藏書は四萬冊(Robson, J. W., A guide to Columbia University, 1927. p. 44.)乃至五萬冊と稱せられ、中には遠く中世に遡るものもあつて、相當數の搖籃期本も含まれて居るといふことである。この文庫にアメリカ――十八世紀以降の――文献が多數に見出されるのは當然であつて、殊に初期の貨幣問題、革命及びその直後の諸文献に優れ、また十九世紀初葉に入つては財政、運輸、保護論に關するものゝ外、勞働問題、社會主義關係の定期刊行物も蒐められて居るが、その最大の特徴は、十六、十七及び十八世紀の英吉利經濟文献の巨大な集積であることである。彼は特に英吉利の貨幣、財政及び鐵道に注意を拂ひ、マカラックの文献目録に記載あるものは悉くこれを網羅し、且つこれに知られなかつた論著をも搜集した。而してそれは初期のものを含む丈けでなく、愛蘭文献にも豐富であるといふ意味で廣さも持つものであり、また獨逸官房派、佛蘭西フイジオクラアトその他、殊に西班牙、伊太利の諸文献も殆んど完全して居る。また彼は勞働問題にも注意を向け、チャチストその他の勞働運動關係定期刊行物をも博く集めた。更にまた佛獨兩國の社會主義文献が完備して居ることも特徴の一であつて、サン・シモン、フーリエ、カベエ等の原版が備へられ、

佛蘭西革命の財政及び佛蘭西社會主義運動――殊に一八三〇年より四八年に至る――に關する夥しい數のパンフレットが蒐められて居る。そしてマルクス、ロオドベルトス、ラサアルその他獨逸社會主義者の文獻は、その本國のいづれの圖書館に於けるよりも完全に聚められ（Palgrave's dictinary of political economy. vol. I. 1925. p. 873-4.）、そのマルクス・エンゲルスのコンパルタ・マニフエスト各版の蒐集は、ソヴエト政府の注目するところとなつて、嘗て買收を申込まれたことがあるといふ（The New York times. July,19. 1939. Obituary.）。

（註）フオックスウェルの文庫はその後第二次蒐集のものもハァヴァド大學に讓られた。

彼はコロンビア大學に就任の直後經濟學説史の講義を受持ち（一八八六年）、その後も隔年經濟學史の講義を行つて、また彼自身にもその大篇を書く計畫があつた（Volkswirtschaftslehre in Selbstdarstellungen. Bd. II. S. 122, 139.）。彼は一九二九年に、近い將來に「特に理論と現實との關係を顧慮した三、四卷より成る一著作」の完成を期したい希望を述べて居る（a. a. O. S. 140.）。この希望が彼に夙くから懷かれて居たことは、Some neglected British economists (Economic Journal. vol. 13. 1903) 中に、「經濟學史はもつと書かれなければならない、とは普通言はれるところである。この名稱の下に今日行はれて居る著述は、甚だ概論的であつて、且つその悉くが、明かに成果最も豐富なるべきところに特に貧弱である」と述べて居ることによつて知られる（p. 335.）。上記論文の外、History of American economics, Curriositics of early economic literature (1920) は、その片鱗を示すものと言へよう（a. a. O. S. 139.）。彼が學史的研究のためこの豐富な文獻を充分驅使利用したことは言ふまでもない。彼自ら The shifting and incidence of taxation (1892) Progressive taxation (1894), 及び The income tax (1911) の歴史的部分は彼の、殊に英吉利の舊時代文獻研究の結果を移したものであり、この他にも後に學説史の一冊に纒め上げる心算で書いた草稿の多數あることを言つて居る（a. a. O. S. 139.）。

彼から直接經濟學史の講義を聽いた門下の人もその文獻的知識の恐ろしく該博であつたことを言つて居る。

この蒐集は、初めは歐羅巴留學時代學生らしい向學心から出發されたものらしい。ハイデルベルクでエマヌエル・レエザーから經濟學史及び社會主義史の講義を聽き、「その影響の下に經濟學史文獻の蒐集を企てた」と述懷して居る（a. a. O. S. 118.）。けれども後にはこの學史的研究の大成が主目的としてなされたに相違ない（a. a. O. S. 139.）。彼の蒐集中に英米文獻の外、西班牙、伊太利、佛蘭西、獨逸のそれが多數に聚められて居るのは、「經濟學は一箇の普遍的學問であつて、國民的なものでない」――序でだが彼は同じところで、獨逸の學者がこの學問を "Nationalökonomie" として居るのは、彼等のためにとらぬと言つて居る――との主張から出て居るのである（a. a. O. S. 144.）。私はこゝにも學者の好事家的でない蒐集の良さが認められるやうに思ふ。

彼と時期を同じくして經濟文獻の蒐集に努めた人に、フオックスウエル教授がある。後者はそのために寛大な銀行さへ承諾しないほどの借財を必要とし、そのため折角蒐めた蒐集を、一度ならず手離さなければならなかつたと言はれるが（Keyns, J. M.; Herbert Sometton Foxwell. in "Economic Journal." Dec. 1936. p. 604.）、彼にはこの苦勞がなかつた。彼には「普通の教授の財囊を遙かに超えて價格を支拂」ふ氣持と財力があつた。彼は「全過去の魂が、明瞭に聽かれる過去の聲が、本の中に籠つて居る」（カーライル）との信念から、この豐富な財力を惜しみなく解放した。そしてフキラデルフキアの有名な愛書家アルバアト・S・バウルス Albert S. Bowles の文庫を購ひ、トオマス・フランシス・プレースの文庫の一部（註）を併合し、アレギサンダア・ハミルトンの經濟文獻全部、アダム・スミス、J・S・ミル、デヴキド・ヒューム等の筆蹟を含む比類鮮き上述の經濟文庫を建設したのである（The New York times, July,19., 1939. Obituary. p. 19.）。彼も亦一般愛書家と同じく、原裝本を好んだが、十八世紀以降のもので原裝訂でないものは、皆主としてリビエール Riviere の手で、總レヴント

若しくは半レヴァントに改裝させた（「リビエール父子に就いては、庄司淺水著「書籍裝訂の歴史と實際」、一二五頁參照」）。前期正統派若しくはそれ以前の經濟文獻には時事問題を取扱ふパンフレットが非常に多く、しかもそれ等は今日數冊合本されて發見されることが多い――ケエンズはそれは十八、九世紀の習慣であつたと言つて居る――のであるが、彼はそれを悉く分冊として製本を改めた。だから彼の蒐集は極めて良い狀態に見出されるのである（Palgrave's dictionary of pol. econ. vol. I. p. 874.）。彼はこれ等の手入れの屆いた書物を、可成り廣い、窓はなく天井から光線を導いた、落着いた一室の周圍に作付けた書架に秩序正しく排列し、客もこれに招じ入れて些か得意であつたといふ。印刷師スメリイ Smellie がアダム・スミスの藏書の「大部分が優美で、あるものには華麗な裝訂が施してある」のを、半ば好奇心から、半ば驚きの眼を見張つて眺めて居た斬に、この偉大なる經濟學の父が「私が書物にだけお洒落であるのに氣が付いたどらうね」と言つたといふ有名な言葉は、他の經濟文獻蒐集者の場合と同じく、彼の文庫の訪問者によつても引用されて居るやうである（Rae, John, Life of Adam Smith. p. 329.; 小稿「書誌學者としてのマカロック」、「學鐙」第四二卷第八號。Economic Journal, Sept. 1939. p. 588.）。

（註）プレースの文庫は兩分せられ、一半はセリグマン文庫に、他の一半は大英博物館に納められた。

この文庫はソヴエト露西亞から丈けでなく、ハアヴアト大學からも買入れの交渉があつたといふことであるが、一九三〇年五萬弗でコロンビア大學に讓られ、今はそこでフエニックス文庫 Phaenix Library その他と共に貴重なものとして保管せられて居る。價格は勿論その讓渡額に倍するものと評價されて居る（Columbia University, Bulletin of information, 1931, P. 136.; The New York Times, Obituary.）。

六

彼は教養の高い多趣味の人であつた。ハイデルベルクから巴里にゆく三月の間を、彼はジェネーヴで過ごした。その折滯在したのが有名な畫家の家庭であつた。彼はそこで繪畫鑑賞の眼を養ふ機會をもつたと言ふ。そして美術の都巴里に移つてからは益々これに對する愛好心が高まり、エコール・デ・ボウ・ザール École des Beaux Arts に出席して樣々な講義を聽き、殊にH・テエヌの土曜日朝の講義を興味深いものに聞いた。彼が十八世紀の佛蘭西美術に對する趣味を解するに至つたのは、それによるものだと言つて居る（Volkswirtschaftslehre in Selbstdarstellungen. Bd. II. S. 119.）。彼は美術史のうちに、社會制度の說明の資となるものが多々あると信じた――「現代の世界に於ける社會法の作用を理解せんと欲するものは、何人も美術が提供する證跡を看過することは出來ない。」（Economic Journal. Sept. 1939. p. 588.）彼は音樂に就いても趣味を缺かなかつた。この素質は父から受繼いだのであつて、ニュウヨオクに住む優れた獨逸人の音樂家からも作曲及び和聲學の教授を享けたとある（a. a. O. S. 119.）。また趣味といふのは不適當かも知れないが、教養の一として彼の語學の素養が擧げられるかも知れない。彼が少年時代家庭教師に就いてギリシヤ・ラテン語を修めたことは前に述べた。その後學校（シュール）時代には獨逸、佛蘭西、伊太利、西班牙語を、大學時代には露西亞語、和蘭語を勉强した。彼は語學を社會科學研究の重要用具と考へたのである。つまり語學を、美術と共に、社會科學の中に入れて居たのである（Ibid. p. 588.）。

彼はまた極めて社交的な人であつた。彼はコロンビア倶樂部のみならず、ニュウヨオクの著作家、シティ、國民美術及び彫塑の各倶樂部、ワシントン、コスモスの會員であつた。人爲は同情深く誠實で、その溫和的な容貌は人から好かれたといふ（Ibid. p. 588-89.）。また專門を同じくする人、殊に年少者には友人以上であり、彼の門下生にはかの豐富なる文獻を備へた私邸に設けられたゼミナアルは、忘れ難い記憶のやうである。

主要著作文献

Owen and the christian socialists. 1886.

Two chapters on the mediaeval guild of England. 1887.

Railway Tariffs and the Interstate Commerce Commission. 1887.

Finance statistics of the American Commonwealth. 1889.

The single tax debates with Henry George. (1890) (Proceedings of the Social Science Association.)

The tenement houses of New York. 1891.

Progressive taxation in theory and practice. 1892. 2. ed. 1908. 佛譯 1908.

The shifting and incidence of taxation. 1894. 4. ed. 1921. 伊太利譯 1906. 日本譯 1910. 佛譯 1911.

Essay in taxation. 10. ed. 1925. 露譯 1909 印度マラータ譯 1910. 佛譯 1911.

Report of the Committee of Economists on the Dismissal of Professor Ross. 1900.

The economic interpretation of history. 1902. 2. ed. 1907. 日本譯 1905. 露譯 1906 西班牙譯 1907. 佛譯 1910. 支那譯 1925.

Principles of economics. 1905. 11 ed. 1932 12 ed. (?) 露譯 1907. 日本譯 1907. 佛譯 1915.

The income tax. 1910. 2. ed. 1914. 佛譯 1914.

The social evil. 1902. 2. ed. 1912.

How to finance the War. 1917. (Columbia War papers. no. 7.)

The house revenue Bill 1917 (—"— no. 16.)

War finance primer (National Bank of Commerse). 1917.

A constructive criticism of United War Tax Bill. (—"—) 1917.

Are stock dividends income? 1919.

Government ownership or government control Railroad. 1919.

Curiosities of early economic literature. 1920.

Currency inflation and public debts. 1921.

Capitalism vs. socialism (A debate with Scott Nearing). 1921.

Report on Double taxation submitted to the League of Nations (together with Messers. Bruins, Einaudi, and Stamp.). 1923.

Wealth and taxation (edited with P. Moon) for the Academy of Political Science. vol. XI-1.

Studies in Public Finance. 1925.

Essays in economics. 1925.

The economics of instalment selling. 1928.

Double taxation and international fiscal co-operation. 1928.

The economics of farm relief. 1929.

Price cutting and price maintenance. 1932.

Report on the revenue system of Cuba. 1932.

本稿の執筆に當りセリグマン教授のゼミナアルに學ばれた慶應義塾大學講師松野喜内氏及び金融研究會經濟學博士大館堯壽氏の教を辱なくしたことを感謝する。

經濟文獻解題

一千八百八十三年版フランシス・デーヴィ・ロング著『ヂョーヂ氏の「進歩と貧困」及びミル氏の賃銀理論の批判的檢討』

高橋誠一郎

一

フランシス・デーヴィ・ロング（Francis Davy Longe）の名は專ら其の賃銀基金說排擊に由つて經濟學史上に記憶せられてゐる。賃銀基金說は凡そ一千八百二十年の頃から同七十年の交に亙る五十年間、英國經濟學界に於いて承認せられて居つた所のものであり、而して此の期間を通じて此の學說が一般に行はれて居つた事實は當時の經濟學說をして勞働階級の間に不評ならしむるに與つて頗る力があつたと言はれてゐる。這般の賃銀學說に對して攻擊を加へた最初の英國人は實にフランシス・デヴィ・ロングであつた。

ロングは一千八百三十一年を以つて生れ、一千八百五十年より五十四年に亙つて牛津大學に學び、此の間に於いてジョン・スチュアート・ミルの經濟哲學に興味を有するに至つた。彼れは一千八百五十八年、辯護士の資格を得、幼年勞働調査委員補（assistant commissioner of the Children's Employment Commission）に任命せられ、大企業家